



式分方だより

ホームページアドレス <http://hachioji-school.ed.jp/nbkte/>



令和8年1月8日



二学期終業式のお話から…

八王子市立式分方小学校

校長 清水 隆 司

二学期の終業式のお話は、正月、各家庭で食べるであろう「お雑煮」のお話です。「校長先生が子供の時に食べていたお雑煮は、『え〜』って言わないで聞いてね…」と中身を伝えると子供たちは素直なので声を出さず、でも周りの友達と顔を合わせています。職員も少し驚いているようでした。「校長先生は、これがお雑煮だと家族をもつまでずっと思っていました。」ご存じの通り、お雑煮は各地方、同じ地方でも家族の出身や好み、代々受け継がれた味、文化伝承に由来するもの等々千差万別。これが当たり前のお雑煮というものはないのです。

終わりに、「せっかくクロムブックがあるんだから、みんなが食べたお雑煮を写真にとって3学期に紹介すると面白いかもね」と伝えましたので、正月早々、各ご家庭で「何で撮るの!」「だって校長先生が…」というやり取りがあったかもしれません…申し訳ありません。

自分が当たり前だと思っていたことが当たり前ではないことに気付き、他を知り、受け入れ、自分と他のよさに気付けることは生きていく上で必要なコンピテンシーです。お雑煮でいえば、大人は新しい発見ができ、その方が生まれ育った地域を尋ねたくなったり、来年はその具材を入れてみようかなと思ったり、自分の見地が広がっていく意識と行動のセットとなる機会となり、コミュニケーションにつながります。子供たちは大人のような考えに至らなくても、関心をもったり、よさを感じたり、自分が食べたお雑煮に合うかなと考えたり、子供たちなりの感じ方から見地を広げていく機会になります。

お雑煮の中身で人間関係が崩れることはありませんが、日常生活の中での「差異」というものから関係に軋轢を生みだします。「スイミー」や「みにくいアヒルの子」等の童話でも大勢の少数の異なるものに対する見方は、違いを排除し、自分たちが当たり前であるということというものがベースとなるものです。それぞれの結末はご存じの通りですが、「差異」を受け入れることの大事さは、昔から人が身に付ける普遍的な価値として、子供たちが成長する過程で身に付けるべきこととして存在していたのでしょう。

人は差異からの違和感を取り除くため、その差異を排除して自分の安心につなげる心理傾向にあります。自分の考えの正しさだけを押し通すことは、味方となってくれていた人の心も離れていくでしょう。しかし、学校では差異こそ学びの出発点であり、そこから合意形成していく過程を学ぶ場です。自分が考えていたことや自分の当たり前は、相手にとってどのように映るのだろうかといった立ち止まり、自分を振り返ることも成長段階に応じて身に付けるものです。

因みに私のお雑煮の中身は青ネギ、甘辛く煮た牛肉、三つ葉、丸餅、白だしのつゆ。皆様はいかが受け止めたでしょうか？

[illegible]